

十二イマーム・シーア派イマーム論におけるアリー裔 —アブドゥルアズィーム・ハサニーの事例を中心に—

Presentation of ‘Alawiyya in the Context of Twelver Shi‘ite Imamology: The Case of ‘Abd al-‘Azīm al-Ḥasanī

吉田 京子

Kyoko YOSHIDA

This article explores how the argument for the unique position of Sayyids is developed in the context of Imamology of the Twelver Shi‘ism. Since the focal point of Imamology is to legitimize the *Imāma* of the specific twelve members of the Prophet’s family, distinct discussion on the Sayyids as the other members of the *ahl al-bayt* (the household of the Prophet Muḥammad) does not appear explicitly. On the other hand, many Sayyids had existed among their followers and influenced their political, social, and religious lives ever since the demise of the Prophet. This paper discusses the case of ‘Abd al-‘Azīm b. ‘Abd Allāh b. ‘Alī b. al-Ḥasan b. Zayd b. al-Ḥasan b. ‘Alī b. Abī Ṭālib (d. 274/887 or 280/893) in al-Shaykh al-Ṣadūq’s Imamological texts and explores the early stages of Sayyid-Sharīf argument in the Twelver Shi‘ism.

はじめに

本論は、十二イマーム・シーア派（以下、十二イマーム派と略記）のイマーム論にサイイド・シャリーフ尊崇を喚起する言及や議論がどの程度内包されているかを、10世紀後半のシャイフ・サドゥーク（al-Shaykh al-Ṣadūq, Muḥammad b. ‘Alī b. Bābawayh, 381/991年没、以下サドゥークと略記）の著作から考察するものである。同派の神学議論の中核をなすイマーム論は、特定の12名の預言者一族について論じるものであるため、彼ら以外の預言者一族を論じることに消極的である。一般的には預言者一族全体を指すものと

* 本稿は JSPS 科研費 19H01317 による研究成果の一部である。

理解されている「お家の人々」(ahl al-bayt) という表現も、同派のイマーム論では、以下の伝承が示すようにムハンマドおよびイマームとファーティマのみを指すものと理解されている¹。

【私 [サドゥーク] の父とムハンマド・イブン・ハサンの二人が、サアド・イブン・アブドゥッラーから、彼はヤアクブ・イブン・ヤズィードから、彼はハンマード・イブン・イーサーから、彼はウマル・イブン・ウザイナから、彼はアバーン・イブン・アビー・アイヤーシュからスライム・イブン・カイス・ヒラーリーが次のように言ったと伝えた。】

[中略] アリー [‘Alī b. Abī Ṭālib, 40/661 年没] 曰く「皆さん承知のように、神はその書で『お家の人々よ、神はあなた方から汚れを払いあなた方が清浄であることを望まれる』[クルアーン 33 章 33 節]と啓示された。[預言者は] 私とファーティマ、息子のハサンとフサインを集め、衣で覆い『神よ、これらの者たちが我が家の人々 (ahl baytī), 我が血縁者 (luḥmatī) です。彼らの痛みは私の痛み、彼らの傷は私の傷であります。どうか彼らから汚れを払い彼らを清浄にしたまえ』とおっしゃった。ウンム・サラマが『神の使徒さま、私は?』と尋ねると、神の使徒は『あなたも善き者ですが、この啓示はほかでもない私と我が兄弟アリーと娘ファーティマと息子のハサン、フサイン、それからフサインの血筋から出る特別な9名のみに関して下ったものです』とおっしゃった」。

「一族」(āl), 「後裔」(dhurriyya), 「子孫」(‘itra) も同様である。「サイド」も彼らのタイトルであり、少なくともサドゥークの著作ではイマーム以外の預言者一族、フサイン裔のために利用されることはない²。

¹ Al-Shaykh al-Ṣadūq, *Kamāl al-dīn wa-tamām al-ni‘ma*, 2 vols., Qom: Intishārāt-i Masjid-i Muqaddas-i Jamkarān, 2007-08, 1: 520-521.

² サドゥークの著作の中には、ムハンマドが「アードムの子孫のサイド」, 「預言者たちのサイド」, 「最初から最後まで全ての人間たちのサイド」であり、アリーが「アラブのサイド」, 「イスラーム教徒のサイド」, 「遺言執行者のサイド」, 「ムハンマド死後のウンマのサイド」, ファーティマが「諸世界の女性たちのサイイダ [サイドの女性形]」, ハサンとフサインが「天国の若人たちのサイド」, 特にフサインが「殉教者たちのサイド」と呼ばれる記述が

その一方で、イマームの顕現期からすでに多くの預言者一族が信者とともに生活し、一定の政治的、社会的、宗教的影響力をもっていたこともまた事実である³。マッカ・マディーナ巡礼やイマーム廟参詣と並び、イマーム親族の墓所（イマームザーデ）への参詣も早い時期から確認されている⁴。イマームのお隠れ（ガイバ）から1世紀以上が経過したサドゥークの時代のイマーム論には、このような預言者一族の現状を鑑み、彼らに関する何らかの言及や主張がみられるのではないか。

以上のような仮説をもとに、本論はサドゥークの著作に頻繁に登場するイマーム以外の預言者一族として、アブドゥルアズィーム・ハサニー（‘Abd al-‘Azīm b. ‘Abd Allāh b. ‘Alī b. al-Ḥasan b. Zayd b. al-Ḥasan b. ‘Alī b. Abī Ṭālib, 274/887 ないし 280/893 年没）をとりあげ、十二イマーム派のイマーム論におけるサイイド・シャリーフ尊崇の端緒を明らかにするものである。

I. アブドゥルアズィーム・ハサニー

1. 人物像

アブドゥルアズィーム・ハサニー（以下、アブドゥルアズィーム）は9世紀のハサン裔第5世代で、十二イマーム派の9代、10代イマームの伝承伝達者として知られている⁵。彼の生涯については、ナジャールシー（Abū l-‘Ab-bās Aḥmad b. ‘Alī al-Najāshī, 450/1058 年頃没）が次のように記録している⁶。

アブドゥルアズィーム・イブン・アブドゥッラー・イブン・アリー・イブン・ハサン・イブン・ザイド・イブン・ハサン・イブン・アリー・イ

散見される。Al-Ṣadūq, *Kamāl al-dīn*, 1: 495–496, 525 etc.

³ 森本一夫「サイイド・シャリーフ研究の現状と展望」赤堀雅幸ほか（編）『イスラームの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会, 2005, 242.

⁴ H. Algar, “Emāmzāda i. Function and Devotional Practice,” in E. Yarshater (ed.), *Encyclopædia Iranica*, VIII-4, 1998, 395–397 (<https://www.iranicaonline.org/articles/emamzada-i> 2022 年 10 月 13 日閲覧); 安田慎『イスラミック・ツーリズムの勃興』ナカニシヤ出版, 2016, 9.

⁵ Al-Khū‘ī, *Mu‘jam rijāl al-ḥadīth wa-taḥṣīl ṭabaqāt al-ruwāt*, 23 vols., 4th ed., Beirut: Dār al-Zahrā’, 1989, 10: 46–51.

⁶ Al-Najāshī, *Rijāl al-Najāshī*, Qom: Mu‘assasat al-Nashr al-Islāmī, 1997–98, 247–248. この逸話は、十二イマーム派におけるアブドゥルアズィームに関する最も詳細かつ最初期の情報とみなされているものである。

ブン・アビー・ターリブ，[クンヤは] アブー・カーシム。

彼の著作には『信徒たちの長の説教の書』(*Kitāb khuṭab Amīr al-Mu'minīn*) がある。

【バルキー (Aḥmad b. Muḥammad b. Khālīd al-Barqī al-Qummī, 274/887–88 ないし 280/893–94 年没) に遡るイスナード】

アブドゥルアズィームは時の権力者の手を逃れ、レイを訪れシカトルマワリー地区の仲間の家に密かに滞在していた。そこで彼は信仰実践に没頭し、昼は断食、夜は不眠の祈りを続け、後に自分の墓所となる場所の向かいにあった墓に詣でたりなどしていた。彼いわく、そこはとあるムーサー・イブン・ジャアファルの子孫の墓ということである。

その後もアブドゥルアズィームは身を潜めていたが、彼の噂は預言者ムハンマドの家の仲間の間に徐々に広まり、やがて大半の人が彼のことを知るまでになった。

ある時、仲間の夢に預言者が現れ「私の子孫の一人が、シカトルマワリーから運び出され、アブドゥルジャッバル・イブン・アブドゥルワッハブの庭のりんごの木の下に埋葬される」とおっしゃり、その場所をお示しになった。そこで、この人はこのりんごの木と土地を買い取ろうと所有者のもとを訪ねた。りんごの木と土地を買い取る理由を尋ねられ、彼が夢の話をする、所有者もまさに同じ夢を見てすでにその木と庭全体を高貴なその方 (al-Sharīf) と彼の仲間のために寄進したということだった。

やがてアブドゥルアズィームは病気で亡くなった。清拭のため服を脱がしたところ、ポケットから系譜が書かれた紙片が出てきた。そこには次のように書かれていた。「私はアブー・カーシム、アブドゥルアズィーム・イブン・アブドゥッラー・イブン・アリー・イブン・ハサン・イブン・ザイド・イブン・ハサン・イブン・アリー・イブン・アビー・ターリブである」。

現在のイランでは、173 年ラビーウ・サーニー月 4 日／789 年 8 月 31 日が生誕日、252 年シャウワール月 15 日／866 年 10 月 29 日が命日とされ、彼の

廟があるレイを中心として毎年記念行事が催される⁷。

彼の時代はアッバース朝5代カリフ、ハールーン・ラシード(193/809年没)の後継をめぐる抗争や各地の反乱が頻発し、イマームを含む預言者一族に対する体制側の圧力が強まった時期である⁸。当時は多くの預言者一族が迫害や拘束を逃れ各地に移住しており⁹、マディーナの有力ハサン裔だったアブドゥルアズィームも支持者やシーア派コミュニティを頼り、タバリスターンなどを転々とした後レイにたどり着いている。レイはアブドゥルアズィームの終の住処となり、彼の墓所は7代イマーム、ムーサーの子孫の墓やそのほかの墓所も取り込む形で壮麗な廟建築へと発展し、現在ではテヘラン州を表する同派有数の参詣地に数えられている¹⁰。

2. アブドゥルアズィーム伝承

現在ではイラン屈指のサイイドとして知られるアブドゥルアズィームであるが、10世紀の段階で彼に言及した資料は極めて限定的である。ナジャーシーはバルキーを典拠として彼のレイとのつながりと埋葬譚を伝えているが、この伝承もナジャーシー以外には記録されていない。ナジャーシー以前の『カッシーの人物録』(*Rijāl al-Kashshī*)にはアブドゥルアズィームの記載はなく、サッフアール・クンミー (Muḥammad b. al-Ḥasan b. Farrūkh al-Ṣaffār

⁷ アブドゥルアズィームの年代特定に関し、マデルンクは西暦815年以前に誕生、10代イマーム没年の868年以前に死亡と推定(W. Madelung, “‘Abd-al-‘Azīm al-Hasanī,” in Yarshater [ed.], *Encyclopaedia Iranica*, I-1, 1982, 96–97 [http://www.iranicaonline.org/articles/abd-al-azim-al-hasani 2022年10月13日閲覧])、サッジャーディーは西暦787–91年頃誕生、868年以前に死亡と推測している(S. Sajjadi, “‘Abd al-‘Azīm al-Ḥasanī,” H. Lahouti and S. H. H. Mesgar [trans.], in W. Madelung and F. Daftary [eds.], *Encyclopaedia Islamica*, 2008 [https://referenceworks.brillonline.com/entries/encyclopaedia-islamica/abd-al-azim-al-hasani-COM_0013?s.num=0&s.f.s2_parent=s.f.book.encyclopaedia-islamica&s.q=Abd+al-Azim+al-Hasani 2022年10月13日閲覧])。

⁸ A. A. Sachedina, *Islamic Messianism*, Albany: State University of New York Press, 1981, 25–28; J. M. Hussain, *The Occultation of the Twelfth Imam*, London: Muhammad Trust, 1982, 34–55; A. J. Newman, *Twelver Shiism*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 2013, 25–31.

⁹ B. Scarcia Amoretti, “A Historical Atlas on the ‘Alids: A Proposal and a Few Samples,” K. Morimoto (ed.), *Sayyids and Sharifs in Muslim Societies*, London and New York: Routledge, 2012, 94–100.

¹⁰ M. H. al-Jalālī al-Ḥusaynī, *Mazārāt ahl al-bayt wa-tārīkhuh*, 3rd ed., Beirut: Mu’assasat al-A’lamī li-l-Maṭbū’āt, 1995, 203; 守川知子『シーア派聖地参詣の研究』京都大学学術出版会, 2007, 89; N. Kondo, “The Shah ‘Abd al-‘Azīm Shrine and Its Vaqf under the Safavids,” N. Kondo (ed.), *Mapping Safavid Iran*, Tokyo: ILCAA, 2015, 42 [41–65]; アリー・ボルークバーシー『ガーリーシュエヤーン』本多由美子(訳注), あいねイラン, 2020, 30.

al-Qummī, 290/903 年没) のイマーム論に関する著作や、フラート (Furāt b. Ibrāhīm b. Furāt al-Kūfī, 10 世紀前半) のクルアーン注解にも伝承伝達者として登場することはない。アブドゥルアズィームへの言及や伝承がみられるのは、バルキーの『美德の書』(*al-Maḥāsin*; 2 伝承), アイヤーシー (Muḥammad b. Mas'ūd al-'Ayyāshī, 320/932 年没) の『クルアーン注釈』(*Tafsīr al-'Ayyāshī*; 1 伝承), クライニー (Muḥammad b. Ya'qūb b. Ishāq al-Kulaynī, 329/940–41 年没) の『充全の書』(*Uṣūl al-kāfi*; 22~26 伝承), クンミー ('Alī b. Ibrāhīm al-Qummī, 9 世紀後半~10 世紀初頭) の『クルアーン注釈』(*Tafsīr al-Qummī*; 1 伝承), ヌウマーニー (Muḥammad b. Ibrāhīm b. Ja'far al-Nu'mānī, 360/971 年没) の『お隠れの書』(*Kitāb al-ghayba*; 2 伝承), イブン・クーラワイヒ (Ja'far b. Muḥammad b. Ja'far b. Mūsā b. Masrūr b. Qūlawayh al-Qummī, 367/977 年没) の『参詣全書』(*Kāmil al-ziyārāt*; 5 伝承) などである¹¹。

アブドゥルアズィーム伝承は、9 世紀後半のバルキーから 10 世紀のクライニー、イブン・クーラワイヒ、サドゥークといったコム of 学党に比較的多く利用されているが、12 代イマームの大ガイバ期 (329/941 年以降) 初期に最も多くのアブドゥルアズィーム伝承を引用しているのはサドゥークである。以下は、現存するサドゥークの著作におけるアブドゥルアズィーム伝承数である¹²。

¹¹ Al-Shaykh al-Tūsī, *Ikhtiyār ma'rifat al-rijāl*, Qom: Mu'assasat al-Nashr al-Islāmī, 2006–07; al-Ṣaffār al-Qummī, *Baṣā'ir al-darajāt fī faḍl al-āliyyīn al-Muḥammad*, Qom: Maktabat Āyatullāh al-Mar'ashī al-Najafī, 1984; Furāt al-Kūfī, *Tafsīr Furāt al-Kūfī*, Tehran: Mu'assasat al-Ṭab' wa-l-Nashr fī Wizarat al-Irshād al-Islāmī, 1990; al-Barqī, *Kitāb al-maḥāsin*, 2nd ed., Qom: Dār al-Kutub al-Islāmī, 1951–52; al-'Ayyāshī, *Tafsīr al-'Ayyāshī*, Tehran: al-Maṭba'a al-'Ilmiyya, 1960–61; al-Kulaynī, *Uṣūl al-kāfi*, Beirut: Manshūrāt al-Fajr, 2007; 'Alī b. Ibrāhīm al-Qummī, *Tafsīr al-Qummī*, Qom: Mu'assasat al-Imām al-Mahdī, 2013–14; Muḥammad b. Ibrāhīm al-Nu'mānī, *Kitāb al-ghayba*, Beirut: Mu'assasat al-'Alamī li-l-Maṭbū'āt, 1983; Ja'far b. Muḥammad b. Qūlawayh, *Kāmil al-ziyārāt*, Muḥammad Zakī al-Ja'farī (ed.), Qom: Dār al-Hujja, 2013.

¹² Al-Ṣadūq, *Uyūn akhbār al-Riḍā*, Beirut: Mu'assat al-'Alamī li-l-Maṭbū'āt, 1984; idem, *Ilal al-sharā' i'*, Beirut: Mu'assat al-'Alamī li-l-Maṭbū'āt, 1988; idem, *Amālī al-Shaykh al-Ṣadūq*, Qom: Mu'assasat al-Ba'tha, 1996–97; idem, *Kamāl al-dīn*; idem, *Man lā yaḥḍuruh al-faqīh*, 4 vols., Beirut: Mu'assasat al-'Alamī li-l-Maṭbū'āt, 1986; idem, *al-Tawḥīd*, Qom: Jamā'at al-Mudarrisīn fī al-Ḥawza al-'Ilmiyya, 2002–03; idem, *Thawāb al-'amal wa-'iqāb al-'amal*, 5th ed., Qom: Ṭalī'at Nūr, 2009–10; idem, *Ma'ānī al-akhbār*, 2 vols., Karbala': al-'Ataba al-Ḥusayniyya al-Muqaddasa, Qism al-Shu'ūn al-Fikriyya wa-l-Thaqāfiyya, 2014; idem, *al-Khiṣāl*, Qom: Jamā'at al-Mudarrisīn fī al-Ḥawza al-'Ilmiyya, 1983. ここでの伝承数にはテキスト間の重複は考慮されていない。

『リダー伝承集』(‘ <i>Uyūn akhbār al-Riḍā</i>)	19 伝承
『聖法の諸根拠』(‘ <i>Ilal al-sharā’i</i> ’)	16 伝承
『講義録』(<i>Amālī</i>)	12 伝承
『信仰の完成』(<i>Kamāl al-dīn</i>)	6 伝承
『法学者不在者の書』(<i>Man lā yahḍuruh al-faqīh</i>)	6 伝承
『神の唯一性の書』(<i>Tawḥīd</i>)	5 伝承
『諸行為の賞罰の書』(<i>Thawāb al-a‘māl</i>)	3 伝承
『伝承の意図』(<i>Ma‘ānī al-akhbār</i>)	3 伝承
『諸特性の書』(<i>al-Khiṣāl</i>)	1 伝承

2003 年レイで開催された「アブドゥルアズィーム記念会議」の成果出版物であるウターリディーの『アブドゥルアズィーム伝承集』(*Musnad-i Ḥaḍrat ‘Abd al-‘Azīm-i Ḥasanī*) によれば、アブドゥルアズィーム伝承の総数は 120 であり、そのうちの 56 伝承がサドゥークを典拠としている¹³。また、サドゥークは『アブドゥルアズィーム・ハサニー伝承集』(*Kitāb jāmi‘ akhbār ‘Abd al-‘Azīm b. ‘Abd Allāh al-Ḥasanī*) の編纂でも知られているが、教友第 2 世代以降で彼の著作のタイトルに名前が冠された人物はザイド (Zayd b. ‘Alī, 121/740 年没) とアブドゥルアズィームのみである¹⁴。『アブドゥルアズィーム・ハサニー伝承集』は現存せず、その内容や執筆の意図は不明であるが、サドゥークがアブドゥルアズィームを特別視していたことは明白である。アブドゥルアズィームはサドゥークの著作で言及される数少ないイマーム以外の預言者一族として、その後の十二イマーム派のサイイド・シャリーフの議論に何らかの影響を与える存在とみなすことができる。

¹³ Al-‘Uṭāridī, *Musnad-i Ḥaḍrat ‘Abd al-‘Azīm-i Ḥasanī*, Qom: Dār al-Ḥadīth, 2003, 19. ウターリディーはこの数字をコンピューター検索により計算された総数としている。同じく 2003 年の会議でジャアファル・スプハーニーは、アブドゥルアズィームの伝承総数について、カザーズィー (Ismā‘īl Fadhālī Kazāzī, 1263/1884 年没) は 60 伝承、クジューリー (Muḥammad Bāqir Kujūrī, 1313/1934 年没) は 57 伝承、カルバースィー (Muḥammad Ibrāhīm Kalbāsī, 1362/1983 年没) は 40 伝承、コンピューター検索によらなかった際のウターリディーは 78 伝承としていると述べている (Ja‘far al-Subḥānī, “Sayyid ‘Abd al-‘Azīm al-Hasanī,” A. Sumar [trans.] [https://www.al-islam.org/sayyid-abd-al-azim-al-hasanī-jafar-subhani 2022 年 10 月 13 日閲覧])。

¹⁴ Al-Khū‘ī, *Mu‘jam*, 17: 343.

II. アリー裔の区分

アブドゥルアズィームの検討に先立ち、サドゥークの基本的預言者一族理解を確認しておきたい。サドゥークのイマーム論の中でサイイド・シャリーフに最も近い用語はおそらく「アリー裔」(al-‘Alawiyya)である。『信仰信条の書』には「アリー裔に関する信条章」、『法学者不在者の書』には「アリー裔に対する善行の報酬章」が設けられている¹⁵。

アリー裔は、厳密にはサイイド・シャリーフと同義ではない。アリー裔は、「神の使徒ムハンマドの後裔」(dhurriyyat Muḥammad rasūl Allāh), 「神の親しき者アリーの子孫」(awlād ‘Alī walī Allāh) などと言い換えられるが、これらの代替用語だけではアリー裔をイマーム以外の親族と確定するには不十分である。「アリー裔に関する信条章」では、クルアーンの「言え。私があなた方に求めるそれ〔預言者性〕への対価は近親者における情愛 (al-mawadda fī al-qurbā) のみであると」(42章23節)を根拠に、「近親者」への情愛が義務であることが説かれているが¹⁶、これはシーア派の基本信条であるイマームへの愛情の義務の域を出るものではない。同様に、「アリー裔に対する善行の報酬章」は、ムハンマドが執り成す人々について「私の後裔 (dhurriyyatī) を助けた者、窮困下の私の後裔にお金を惜しまず与えた者、言葉と心で私の後裔を愛した者、追放され追い出された私の後裔の必需品を求め奔走した者」、「私の後裔に敬意を表す者、彼らの負債を清算する者、彼らの必需品のために奔走する者、心と言葉で彼らを愛する者」と説明する¹⁷。これは通常、サイイド支援についての規定と理解される部分であるが、後裔という語がイマームを指す場合が圧倒的に多いイマーム論の視点からは、イマームの支援についての規定であるという解釈も成立する。また、サドゥークは別の著作でアリー裔を「復活の日、人々を覆う暗闇を照らす光とともに現れる一団で、神が執り成しすることを認めた者たち」とも説明しているが、執り成しは本来、預言者やイマームの権能である¹⁸。

¹⁵ Al-Ṣadūq, *Man lā yaḥḍuruh al-faqīh*, 2: 42; idem, *al-I’tiqādāt*, 3rd ed., Qom: Mu’assasat al-Imām al-Hādī. 2013–14, 358–368; idem, *A Shiite Creed*, A. A. A. Fyzee (trans.), 3rd ed., Tehran: WOIS, 1999, 99–100.

¹⁶ Al-Ṣadūq, *al-I’tiqādāt*, 358–360.

¹⁷ Al-Ṣadūq, *Man lā yaḥḍuruh al-faqīh*, 2: 65.

¹⁸ Al-Ṣadūq, *Amālī*, 358.

このように、イマーム論では親族用語の大部分がイマームと結びついてしまうため、アリー裔という表現だけでそれがサイド・シャリーフに関する言説であると早急に判断することはできない。アリー裔に関するこれらの章がサイド・シャリーフに適応される根拠は、サドゥークが「アリー裔に関する信条章」で示した預言者一族の区分解釈によって初めて可能となる¹⁹。

サドゥークは、クルアーンの「われらはヌーフとイブラーヒームを遣わし、彼らの後裔(dhurriyya)に預言者性と啓示の書を与えた。彼らの一部は正しく導かれたが、大半は道を踏み外した」(57章26節)、「われらは下僕の中から選び出した者たちに、啓示の書を継がせた。彼らの中には、自らに不正をはたらく者、中道をいく者、神の許しのもと善行に先んじる者がいた」(35章32節)を引き合いに出し、預言者一族が「正しく導かれた者」と「道を踏み外した者」の2種、または、「自らに不正をはたらく者」、「中道をいく者」、「神の許しのもと善行に先んじる者」の3種に分類されると説いている。続けてサドゥークは、後者の3区分がそれぞれ「イマームの権利を認めない者」、「イマームの権利を認める者」、「イマーム自身」にあたることを明らかにしている²⁰。

この預言者一族のうちわけによってサドゥークは、さまざまな親族関連用語が常にイマーム（およびファーターティマ、預言者ムハンマドを含めた14名の無謬者）のみを指すわけではなく、場合によっては、それ以外の親族も対象範囲となる可能性を確認する。この解釈にもとづけば、アリー裔にはイマームだけでなく「イマームの権利を認める」親族と「イマームの権威を認めない」親族が含まれることになる。イマームの権利を認める親族は、預言者一族の2区分ではイマームと同じ「正しく導かれた者」に入るため、属性や信者の対応がある程度イマームと重なる。先の執り成しや愛情の議論がイマームと重なるのはそのためである。反対に、預言者一族であってもイマームの権利を認めないアリー裔は、「道を踏み外した者」に分類されるため、罪に対する罰は倍加し、非難の対象となる²¹。

これらのアリー裔に関する章は短く、上記のような基本理念やわずかな法

¹⁹ Al-Ṣadūq, *al-I'tiqādāt*, 358–360.

²⁰ Al-Ṣadūq, *al-I'tiqādāt*, 364.

²¹ Al-Ṣadūq, *al-I'tiqādāt*, 363.

学規定を伝えるのみで、具体的なサイド・シャリーフのあり方などの議論には至らない。サドゥークの関心は、彼らがイマームに対しどのような態度、信仰を持っているかという点であり、彼の著作に登場するアリー裔は基本的にこの区分を象徴する存在といえる。

III. ジャアファル・イブン・アリー —「イマームの権利を否定する」アリー裔—

イマームの権利を認めず、道を踏み外したアリー裔の典型としてサドゥークの著作に頻出するのは、11代、12代イマームと競合した10代イマームの息子ジャアファル・イブン・アリー (Ja'far b. 'Alī al-Hādī, 271/885年没) である。ジャアファルの支持者は10代イマームの死直後にはすでに一定数存在していたとされており、ジャアファルはイマーム派信者にとって11代イマームの最大の競合者とみなされている。さらに11代イマームの死後は、お隠れのイマームではなくジャアファル支持に転向するイマーム派信者が続出し、12代イマームにとってもジャアファルは最大の脅威である²²。

11代イマームの兄ムハンマドも一定数の支持者を抱えていたが、父親の生前に死亡していることからジャアファルのような脅威とはみなされず、むしろ、弟ハサンが真の11代イマームであることを証明するため先に死亡したという好意的解釈が一般的である²³。ムハンマドは高名なサイドとして尊敬され続け、現代でもバラドにある彼の墓所は十二イマーム派の重要な参詣地とされている²⁴。

それに対して同じイマームの息子であり兄弟であるジャアファルは、兄弟ハサンのイマーム位を否定し自らにその権利を主張した、生まれながらの「嘘つき」と形容される。

【アリー・イブン・アブドゥッラー・ワッラークが私たちに伝え、彼はムハンマド・イブン・ハールーン・スーフイーから、彼はウバイドゥッ

²² Sachedina, *Islamic Messianism*, 44–45; Hussain, *The Occultation*, 57–66; al-Nawbakhtī, *Kitāb firaq al-shī'a*, Beirut: Dār al-Aḍwā', 1984, 98–100.

²³ Al-Mufīd, *Kitāb al-Irshād*, I. K. A. Howard (trans.), London: The Muhammadi Trust, 1981, 508–509.

²⁴ M. al-Amīn, *A yān al-shī'a*, vol. 10, Beirut: Dār al-Ta'āruḥ li-l-Maṭbū'āt, 1983, 5.

ラー・イブン・ムーサーから、彼はアブドゥルアズィーム・イブン・アブドゥッラー・ハサニーから、彼はサフワーン・イブン・ヤフヤーから、彼はイブラーヒーム・イブン・アビー・ズィヤードから、彼はアブー・ハムザ・スマーリーから、彼はアブー・ハーリド・カーブリーが次のように言ったと伝えた。】

我が長であられるアリー・イブン・フサイン、ザイヌルアービディーン [4代イマーム] 曰く「父が私に、父は祖父から、祖父は神の使徒が次のように言ったと伝えた。『私の息子ジャアファル・イブン・ムハンマド・イブン・アリー・イブン・フサイン・イブン・アリー・イブン・アビー・ターリブが生まれたら、彼をサーディク [正しい者] と名づけなさい。というのも、彼の息子の5代後にジャアファルという名の者が生まれるが、不遜にも彼は神に対し嘘をつき、イマーム位を要求するからである。彼はジャアファルはジャアファルでも、神のもとではカッザーブ [嘘つき] であり捏造者である。彼は不相応なものを要求し、父に反抗し、兄弟を妬む者である。この者は、神の友がお隠れの間に神のとばりを外そうとする者である』」。

イマームはその後激しく泣いてからおっしゃった。「私はこのジャアファル・カッザーブの様子が手に取るようにわかる。時の権力者に、神の友の使命や神の保護に隠されているお方、その父の妻 [母親] の委任などを調査させようとする。その方 [12代イマーム] の誕生も知らず、彼の殺害を望み、その遺産を食い物にし、権利もないのにそれを奪おうとするのだ」。²⁵

このほかにもジャアファルについては、10代イマームが彼の誕生を喜ばなかったことや、素行の悪さで知られ、自らの行いや発言に無頓着な酒飲みであること、11代イマームの死後カリフと結託し、相続人となりうる息子を検索し女性たちを監視したこと、ハサンの遺産を奪い屋敷を占拠、イマームのための資金を横領したこと、11代イマームと同じ地位や名声を得ようと宰相に賄賂で口添えを願ったことなど、非難に値する行動や性格の否定的

²⁵ Al-Ṣadūq, *ʿIlal al-sharāʿi*, 314; idem, *Kamāl al-dīn*, 1: 587–588.

側面に焦点を当てた伝承が多数伝わっている²⁶。

このような否定的情報がどの程度史実を反映したものかは不明である一方、彼がアッバース朝カリフと親交のある有力なアリー裔の一人で、支持者がジャアファル派を形成するほど存在したことは歴史的事実である²⁷。サドゥークが取り上げるのは、歴史的事実としてのジャアファルの社会的立場やイマームとの近さではなく、彼の「イマームの権利を認めない」点のみである。言い換えれば、サドゥークはジャアファルを通じて「道を踏み外し、自らに不正をはたらき、イマームの権利を認めない」アリー裔の具体的な姿を提示し、彼に神学的評価を下していると考えられる。サドゥークに登場するジャアファルは、その後のサイイド・シャリーフも対象範囲となる預言者一族としてあってはならない行動や資質を示す具体的な範型の役割を果たしている。

IV. アブドゥルアズィーム・ハサニー —「イマームの権利を認める」アリー裔—

1. 信仰の表明

ジャアファルが「道を踏み外し、自らに不正をはたらき、イマームの権利を認めない」アリー裔の典型であるのと同様、サドゥークに登場するアブドゥルアズィームは「正しく導かれた、イマームの権利を認める」アリー裔の典型といえる。サドゥークの著作がもたらす彼のイメージもまた、歴史的事実というより同派のイマーム論が提示する預言者一族のあるべき姿を示した範型とみなしうる。

アブドゥルアズィームの第一の特徴は、イマームとの親密さに由来する正しい信仰の保持とその表明である。彼は9代イマーム、ムハンマド・ジャワード（220/835年没）および10代イマーム、アリー・ハーディー（254/868年没）の伝承伝達者で、サドゥークの著作には9代イマームから18伝承、10代イマームから8伝承が収録されている。伝承伝達者としてのアブドゥルアズィームを際立たせているのは、以下の伝承にあるように、伝承内の出

²⁶ Al-Mufīd, *Kitāb al-Irshād*, 514; al-Ṣadūq, *Kamāl al-dīn*, 1: 82, 590, 2: 173, 223–229.

²⁷ Al-Nawbakhtī, *Firaq al-shī'a*, 98–108; Sachedina, *Islamic Messianism*, 41–49.

来事に主体的に関わりイマームの教えを引き出す役割を担っている点である²⁸。

【アリー・イブン・アフマド・イブン・ムーサー・ダッカーク、アリー・イブン・アブドゥッラー・ワッラークが私たちに、彼はムハンマド・イブン・ハルーン・スーフイーから、彼はアブー・トゥラーブ・アブドゥッラー・イブン・ムーサー・ルーヤーニーから、彼はアブドゥルアズィーム・イブン・アブドゥッラー・ハサニーが次のように言ったと伝えた。】

私が我が長 (sayyidi) アリー・イブン・ムハンマド [10 代イマーム] のもとを訪ねると、彼は私を見て「ようこそ、アブー・カーシム。本当にあなたは私たちの親しい者 (waliyyunā) である」とおっしゃった。私は「神の使徒のご子息、私は自分の信仰をあなたにお示ししたいと思います。あなたがそれに満足なされば、私は神と出会うその時までこの信仰にしっかり留まるつもりです」と言った。イマームに促され私は次のように言った。「私は主張します。神は唯一であり、神のようなものは何もなく、神はイブタール [否定神観] やタシュビーフ [擬人神観] による限定を超越し、神は肉体も形相も偶有も本質ももたず、肉体を肉体たらしめる者、形相を形相たらしめる者、偶有や本質を創造する者であり、神は全てのものの主、支配者、作動者、起動者であると。

また、ムハンマドは神の下僕、神の使徒であり、預言者の封印ということから彼以降復活の日まで預言者は存在せず、彼の聖法は諸聖法の封印であることから、復活の日までそれ以外の聖法はないと。

また、私は次のことを主張します。ムハンマドの後のイマーム、カリフ、権能の守護者は、信徒たちの長、アリー・イブン・アビー・ターリブであり、ハサン、フサイン、アリー・イブン・フサイン、ムハンマド・イブン・アリー、ジャアファル・イブン・ムハンマド、ムーサー・イブン・ジャアファル、アリー・イブン・ムーサー、ムハンマド・イブン

²⁸ イマームの言葉を伝えるだけでなく、イマームとの関係の深さを背景に同派の神学・法学議論で重要な役割を担っている人物としては、サルマーンやアブー・ザッル、ジャービル・イブン・アブドゥッラー・アンサーリー、ヒシャーム・イブン・ハカムなどが挙げられるが、預言者一族は稀有である。

ン・アリー、そして我が守護者であられるあなたへと続くと」。

この時アリー〔イマーム〕は私に「そして、私の次に私の息子のハサンが続くが、彼の死後は人々のための後継者はどうなるか」とお尋ねになった。私が「どうなるのでしょうか、我が守護者よ」と問うと、彼は次のようにおっしゃった。「その者は姿を見せず、名前を述べるのが許されない。彼は最終的に現れ、地上をかつて不正と抑圧が満ちたのと同じように今度は地上に正義と公正を満たす」。私はさらに続けた。「私は次のことを断固として主張します。この方々と親しい者は神と親しい者であり、この方々の敵は神の敵であり、彼らへの服従は神への服従であり、彼らへの反抗は神への反抗であると」。

また、私は次のことを主張します。預言者ムハンマドの昇天と墓での尋問は真理であり、天国、業火、橋、秤もまた真理であり、かの時は間違いなくおとずれ、神は墓中の者を復活させると。

また、私は次のことを主張します。イマームへの恭順に次ぐ必須の義務は、礼拝、喜捨、断食、巡礼、ジハード、勧善禁悪であると」。

そこでアリー・イブン・ムハンマドは次のようにおっしゃった。「アブー・カーシムよ、これらは、神に誓って、神が下僕のために承認された神の信仰 (*dīn Allāh*) である。ゆえに、そこに確実に留まっていなさい。神があなたを現世においても来世においてもこの確実な主張に留まらせてくださいますように」。²⁹

アブドゥルアズィームはイマームから「私たちの親しい者 (*waliyyunā*)」と呼ばれ、歓迎され、自らの信条を詳細にわたり直々に確認してもらえるほどイマームと親しい。この親密さは、彼らの親族関係に由来するのではなく、知の探究者と知の源泉の間にある師弟関係の絆として描かれている。サドゥークの著作にはこれ以外にも、アブドゥルアズィームがイマームに食ひ下がり、納得するまで延々とアリーの格言を聞き出すエピソードや、イマームのクルアーン解釈に対し、たたみかけるように合いの手を入れ詳細な解説を要求する伝承など、アブドゥルアズィームが学問上の弟子としてイマーム

²⁹ Al-Ṣadūq, *Amālī*, 419–420; idem, *al-Tawhīd*, 81–82; idem, *Kamāl al-dīn*, 2: 73–75.

と親密に交流していた様子が伝えられている³⁰。

このようなイマームとの知的交流の最大の成果が「神の信仰」の確立であり、イマームによるその承認である。「信仰表明の伝承」として知られるこの伝承に示されたアブドゥルアズィームの信条は、サドゥークが『信仰信条の書』などで提示している12イマーム派信条と重なるものである。サドゥークは自らの代弁者として、アブドゥルアズィームに12イマーム派の信条を告白させイマームから承認を引き出す役割を担わせている。

2. 救世主（マフディー）としての12代イマームの支持

アブドゥルアズィームの第二の特徴は、12代イマームに関する議論における役割である。12代イマームのお隠れと再臨に関する『信仰の完成』には、先のジャアファルの伝承や「信仰表明の伝承」も合わせ、六つのアブドゥルアズィーム伝承が引用されている³¹。いずれも12代イマームがハサン・アスカリーの息子ムハンマドであることを伝えるもので、アブドゥルアズィームは9代、10代イマームからの指名を伝える主要伝達者である。そこで強調されているのは、「剣を持って立ち上がる者（カーイム）」として地上の悪と不正を一掃し正義と公正で満ちた救世主（マフディー）は12代イマームであるという点である³²。

【アリー・イブン・アフマド・イブン・ムーサー・ダッকারクは私たちにムハンマド・イブン・ハルーン・スーフイーから、彼はアブー・トゥラブ・アブドゥッラー・イブン・ムーサー・ルーヤーニーから、彼はアブドゥルアズィーム・イブン・アブドゥッラー・ハサニーが次のように言ったと伝えた。】

私は、我が長（sayyidi）ムハンマド・イブン・アリー・イブン・ムーサー・イブン・ジャアファル・イブン・ムハンマド・イブン・アリー・イブン・フサイン・イブン・アビー・ターリブ〔9代イマーム〕を訪ね

³⁰ Al-Ṣadūq, *ʿUyūn akhbār al-Riḍā*, 1: 58; idem, *Man lā yaḥḍurh al-faqīh*, 3: 222–224; idem, *Amālī*, 323–324.

³¹ Al-Ṣadūq, *ʿUyūn akhbār al-Riḍā*, 1: 58; idem, *Man lā yaḥḍurh al-faqīh*, 3: 222–224; idem, *Amālī*, 323–324.

³² 12代イマームの呼称、権能については Sachedina, *Islamic messianism*, 60–66 参照。

た。カーイムは救世主であるか否か尋ねたかったのだが、イマームは私より先に次のようにおっしゃった。「アブー・カースィムよ、私たちから出るカーイムは救世主である。彼がお隠れの間は彼を待ち、現れた際には彼に服従しなければならない。彼は私から3代先の者である。ムハンマドを預言者性とともに遣わし、私たちをイマーム性によって特別な者にされたお方にかけて、たとえ現世があと一日になったとしても、彼が現れ、地上に不正と悪が満ちていたように地上を正義と公正で満たすまでは、神は最後の一日を引き延ばされる。まことに、祝福され至高なる神は、彼の権能を一晚でもと通りに回復してくださる。神の語り手ムーサーが家族のために火を求め出かけた後、神の使徒、預言者となって戻り、彼の権能がもと通りに回復されたように」。さらにイマームは続けておっしゃった。「私たちの仲間（shī‘atunā）の最善の行為は、解放の時を待つことである」。³³

剣を持って立ち上がるカーイムが誰なのか、この世に正義と公正を満たす預言者一族から出る救世主が誰なのかは、アブドゥルアズィームが「信仰の表明」の際に唯一知らなかった項目である。これはアブドゥルアズィームだけでなく、サドゥークの時代の多くのイマーム派信者にとっても未知の疑問であり、サドゥークが『信仰の完成』を執筆した最大の理由でもあった。アブドゥルアズィームは、武装蜂起するカーイムがほかならぬ12代イマームであること、彼は終末に現れ、地上に正義と公正を満たす救世主であることをイマームから直接教わり、この信条を信じることで「神の信仰」を完成させている。このアブドゥルアズィームの信仰理解と信仰保持の姿勢は、サドゥークが『信仰の完成』と題した同書で信者に促した態度そのものである。

さらに、アブドゥルアズィームは12代イマーム再臨までは武装蜂起ではなく「待つこと」をよしとする姿勢を体现し、マッカでマフディー宣言をして武装蜂起したムハンマド・イブン・ジャアファル（203/818年没）を、父親（6代イマーム）が12名のイマームやカーイムについて語るのを聞いた

³³ Al-Ṣadūq, *Kamāl al-dīn*, 2: 70–71.

にもかかわらず武装蜂起したと、名指しで非難している³⁴。

3. 参詣

アブドゥルアズィームの第三の特徴は、同派の参詣 (ziyāra) との関わりである。彼は、10 世紀の時点で預言者との邂逅夢や埋葬譚が文献に残され参詣地と結びつけられている数少ないアリー裔である。彼がレイで墓参していた7代イマームの子孫などは、今では7代イマームの息子ハムザと同定され同派の参詣対象となっているが、彼とレイを結びつける初期の伝承や具体的な埋葬譚は知られていない。9 世紀には埋葬譚が伝えられていたアブドゥルアズィームを同派の正当な参詣対象へと格上げし、後のイマーム親族 (イマームザーデ) 参詣の理論的枠組みを築いたのは、10 世紀のコムの学者、特に、サドゥークとイブン・クーラワイヒである³⁵。両者はアブドゥルアズィームの墓所参詣をイマームの墓所参詣と同格に扱う次のような伝承を引用している。

【アリー・イブン・アフマドが私たちにハムザ・イブン・カースィム・アラウィーから、彼はムハンマド・イブン・ヤフヤー・アッタールから、彼はアブー・ハサン・アリー・イブン・ムハンマド・ハーディー [10代イマーム] を訪ねたレイの者が次のように言ったと伝えた。】

私がアブー・ハサン・アスカリー [10代イマーム] を訪ねた時、彼は私がどこにいたかをお尋ねになった。そこで私が「フサインの墓参に参りました」と言うと、彼は「あなたの場合、あなた方のところにあるアブドゥルアズィームの墓を訪れば、フサイン・イブン・アリーを墓参したのと同じだった」とおっしゃった。³⁶

アブドゥルアズィームがイマームの墓所参詣の代替となる根拠として、サ

³⁴ Al-Ṣadūq, *Kamāl al-dīn*, 1: 576.

³⁵ イブン・クーラワイヒはサドゥークと同時代のコムの学者で、サドゥークの父やクライニーに師事し、シャイフ・ムフィードの伝承の師としても知られている。彼の『参詣全書』は主に3代イマーム、フサインの死とカルバラー参詣に関する伝承集で、ムハンマドやその他のイマーム、ファーティマの墓所参詣についても触れる。それらに続いて、アブドゥルアズィームと8代イマームの姉妹ファーティマの墓所参詣についても言及がある。

³⁶ Al-Ṣadūq, *Thawāb al-a'māl*, 126–127; Ibn Qūlawayh, *Kāmil al-ziyārāt*, 107.

ドゥークは「お家の人々」の参詣がかなわない場合、彼らと親しい者の中の行い正しい者の参詣を推奨する6代イマームの伝承を引用している³⁷。この「彼らと親しい者の中の行い正しい者」として、「正しく導かれ、イマームの権利を認めるアリー裔」に属し、イマームから親しい者と呼ばれ、熱心な信仰実践で知られていたアブドゥルアズィームが最適であることは間違いがない。

アブドゥルアズィームは、法的論拠としての真正かつ具体的な伝承をもった最初のイマームザーデといえる。すでにアブドゥルアズィーム自身が行っていたように、9世紀にはイマーム派共同体の地理的拡散や政治的、社会的、文化的事情を背景に、マッカ、マディーナ、カルバラー巡礼とは別に、より身近な地元の預言者一族、聖者が参詣対象とされていた。サドゥークは、「正しく導かれ、イマームの権利を認める」アリー裔が預言者やイマームの言葉によって埋葬地と結びつけられることで、預言者やイマームの代替として参詣対象となり、信者の執り成しされることを、アブドゥルアズィームを通じて承認している³⁸。

おわりに

競合する親族の権威を排除することでイマーム位を立証するイマーム論では、預言者一族全体を表す親族用語の大半はイマーム（およびムハンマドとファーティマを含めた14名）を指すものと理解され、イマーム以外の預言者一族についての議論の余地はほとんどない。

しかし、12代イマームのお隠れから1世紀以上が経過し、多くのサイド・シャリーフが預言者一族として信者とともに暮らしていた10世紀後半の神学には、彼らに対する一定の配慮や言及がみいだされる。当時の十二イマーム派における神学、法学上の権威であるサドゥークは、神に選び出された者に関するクルアーンの文言にもとづき、親族用語のアリー裔を「正しく導かれた者」と「道を踏み外した者」に分け、さらに前者を「イマーム」(善行に先んじる者)と「イマームの権利を認める者」(中道をいく者)のことで、

³⁷ Al-Ṣadūq, *Thawāb al-a'māl*, 127.

³⁸ Algar, "Emāmzāda."

後者を「イマームの権利を認めない者」(自らに不正をはたらく者)のことでありと説明している。この区分により、アリー裔は、イマーム(だけ)ではなくそれ以外の預言者一族(サイイド・シャリーフ)を含むことが確認され、サイイド・シャリーフの議論に道が開かれた。

しかし、当時のイマーム論にはそれ以上の議論はみいだされず、アリー裔はあくまでイマームの競合者として非難されるか、同派の信条の強力な支持者として取り込まれるかのいずれかに留まっている。本論で検討したジャアファル・イブン・アリーとアブドゥルアズィームについても、サドゥークは彼らがイマームを支持するか否かという点に焦点を当て、12代イマームの正当化の議論に利用するに留めている。

サドゥークがアリー裔の歴史的人物描写に関心を持っていなかったことはジャアファルの事例からも明らかであるが、唯一、アブドゥルアズィーム参詣に関する主張は、共同体におけるサイイド・シャリーフの立場や社会的影響力に関する一歩踏み込んだ議論といえる。①アリー裔の男性であり³⁹、②イマームから直接称賛され、③イマームから知識を伝授・伝達し、④十二イマーム派の信条、特に、12代イマームについて正しく認識し、⑤自らイマーム位を主張せず武装蜂起に参加せず、⑥ムハンマドにより埋葬地と結びつけられ、⑦イマームによって参詣が推奨される。サドゥークによるこのようなアブドゥルアズィーム像は、後のイマームザーデ参詣の理論的枠組みを提供する最初の事例として、同派のサイイド・シャリーフ論に貴重な論拠を与えるものである。サドゥーク同様、アブドゥルアズィーム参詣に言及したイブン・クーラーワイヒやクライニーも、当代のコムの十二イマーム派を代表する同門であった。レイのアブドゥルアズィーム参詣は、10世紀のサイイド・シャリーフの存在感の高まりを反映し、派をあげて推奨されたサイイド・シャリーフ尊崇に関する初めての具体的な規定といえる。

³⁹ 女性親族はイマームと競合する存在でないため、イマーム論において積極的に言及されない。例外的に同派のイマーム論で言及がみられるのは、預言者の娘ファティマ、8代イマームの姉妹ファティマ、3代イマームの姉妹ザイナブ程度である。